



Title	編集後記
Author(s)	
Citation	モンゴル研究. 2012, 27, p. 28-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102375
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

編集後記

◇電子版第2号、『モンゴル研究』第27号は全くもって難産だった。当初、予定されていた二つの論文、期限後に申し出を受けつけた研究ノート（？）はいずれも結局掲載できなかった。最初に入稿された原稿のうち、バットトグトフさんの軽妙洒脱な雰感だけが時空を超えて残った。

◇糸余曲折を経て誕生した第27号、だが新しい芽吹きが見られるものとなった。会員としては最も新しいお二人、李恩敬さんとヒシグデルゲルさんが日本語の壁を乗り越えて、投稿してくれた。トレーニングされた方法に基づき現地での調査を分析した李論文、モンゴルでの日本語教育の実践を基盤としたヒシグデルゲルさんの研究ノート、いずれも今後の展開が楽しみである。

◇編集にあたって、反省すべき点は多い。

「投稿申し出→中間発表→原稿提出（査読）→合評会」といったこのプロセスを疎かにしてはいけないと思った。特に、中間発表は重要である。ここでの意見交換がモンゴル研究会の根幹ではと感じた。問題意識やテーマの掘り下げ、論文には表だって出て来ずともその根底にあるもの、それをお互いに鍛えることのできる場である。また、原稿提出に当たっては、投稿規程の遵守が望まれる。『モンゴル研究』は先人たちの努力で一定のレベルに到達した。それは脈々と受け継がれている学究的姿勢もある。投稿期限の順守も当然だ。ルールを守ることは、他者の尊重に繋がる。編集体制も整っていない。できれば、編集会議（または編集委員会）を明確にもちたいと思った。原稿提出後の査読は、良いものとするために必須の協同作業である。そして次に向けての合評会がある。

◇石の上にも三年。さて、2013年は貪欲に、通常の『モンゴル研究』の号の他、特集号の発行を予定している。特集号では、”モンゴルのウラン鉱山、原子力発電所建設、核廃棄物処分場建設問題”を取り上げる。本格的な特集号は初めてで、どうなるかは予測不可能だ。通常の号の発行も青色吐息の現状で無謀かもしれないが、モンゴル研究会の内にあるものの一つの表出だと考えている。

◇『モンゴル研究』は生物であり、育ち、育てていくものだと思う。会員の皆さんのが投稿が全てである。

（吉本るり子）